

# 資料紹介 立木貝塚採集の土偶

國學院大學では、茨城県の霞ヶ浦から千葉県印旛沼周辺で大正期〜昭和初期に採集された縄文土偶八九点を新たに収蔵した。出土状況などは不明だが、採集の遺跡名と時期の書

かれたラベルが貼付されており資料的価値は高い。茨城県南部には椎塚貝塚、福田貝塚など百点以上の土偶を出土する縄文時代後期の遺跡が集中することが知られており、今回の



収蔵品にもこれらが数点含まれているが、利根町立木貝塚からの五六点が最多である。

立木貝塚は明治期より小発掘が繰り返され、千点とも言われる土偶の最多出遺跡として知られてきたが、

正式な発掘報告は明治大学が行った二回のみで、東京国立博物館二

二点、東京大学二一点、明治大学一七点をはじめ国内の大学、博物館、個人所蔵

のもの計約一二〇点が公表されている程度である。本学でも故野口義磨氏寄贈の二点を所蔵していた。

今回収蔵した五六点の大半は縄文時代後期中葉の東関東を中心に分布する「山形土偶」とみられ、その後

に盛行する「ミミズク土偶」も数点含まれる。これらがいずれも手のひらに収まるサイズで、頭部、胴部、腕部、脚部などバラバラの状態であることは、縄文土偶一般の特徴と共通する。



本格的な調査研究は今後の課題であるが、例えば頭部に赤彩を施した例、部位ごとに粘土塊をつなぎ合せて作られたものがすっぽりと抜けてしまった例などがある。

また、多数の脚部破片の中には足先に最大六本もの刻みを持つものがある一方で、手に指の表現は見られないことは、山形土偶に投影された身体イメージを探る上で興味深い。

(中村耕作)